哲学研究　第五百四十七号

調査(一)

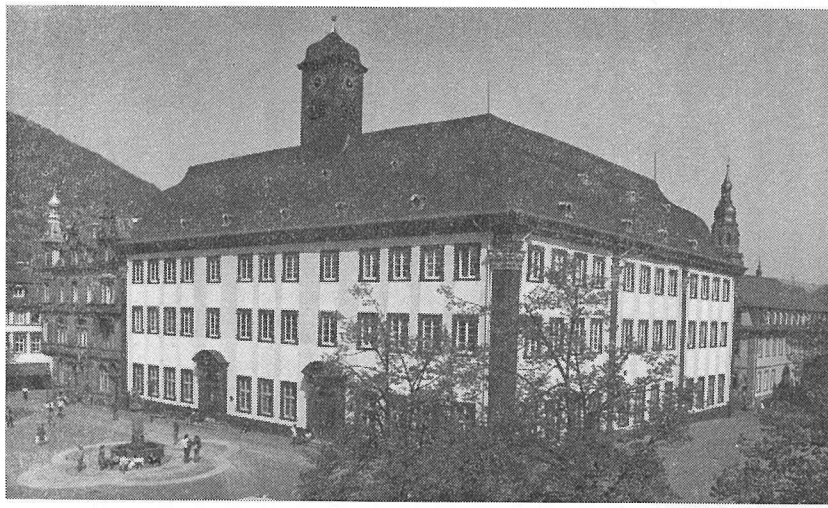
エルウィン・ベルツの遺産

佐々木丞平

昨年（昭和五十七年）の夏期休暇中、ハイデルベルク大学が保管するベルツ・コレクションを調査する機会に恵まれた。ベルツという名を聞くと、戦後生まれの若い世代はともかくとして、もしやと心に思い当る人も多いかと思う。明治維新間もない日本に腰を据え、ある時は当時の日本が西欧化へと猪突猛進するその姿勢に厳しい批判を加え、又ある時は日本人をこよなく愛し、日本の社会に深くのめり込んで行くドイツ人医師ベルツが、折りに触れて書きつづった日記は日本人にとってまさに大きな知的遺産であったに相異ないが、あの日記の著者ベルツのことではと思う人も多いであろう。又、戦後になって薬用品や化粧品が豊富に出回る以前は、ほとんどの人が一度ならず〝ベルツ水〟のお世話になっているはずである。私などは母や姉がその名を口にし、寒い冬の日、霜焼や皸の手にこの〝ベルツ水〟を塗ってもらったことをかすかに記憶の隅に止めている

に過ぎない。その意味では、ベルツという名にとって正にその存在をあやうくさせている世代の一人なのであるが、とにかく、薬用品や化粧品不足の時代にあって、〝ベルツ水〟も日本の大衆社会に遺してくれた大きな遺産であったことは確かである。ベルツというのはこの〝ベルツ水〟考案者ではないのだろうかと思う人もあろう。その通りであって、私がここで触れようとするベルツは、『ベルツの日記』の著者であり〝ベルツ水〟の考案者であるその人のことである。

彼がもう一つの遺産を残してくれていることを知ったのは一昨年十一月のことである。ハイデルベルク大学美術史研究所のレダローゼ教授が数枚の写真をもって来室された。円山応挙、松村景文、柴田是真など、江戸時代中期から幕末、明治初期にかけての絵の写真であったが、この時始めてベルツ・コレクションなるものの存在を知ったのである。同教授の話によると、このコレクションはシュトゥッツガルトのリンデン美術館の所有物であるが、ハイデルベルク大学がこのコレクションを一括して借り受け、研究の便に供しようとするもので、ハイデルベルク大学の最も古い建物の一部を展示室に改装し、その展示にこのコレクションを活用しようというのである。しかし、それらの計画はさておき、当事者の間ではこの眠れる厖大な数のコレクションの全貌を明かるみに出したいという共通の関心があったようで、このコレクションの全目録の作成が計画中であった。そのためにもコレクションの基礎調査が必要で、美術史研究所の中で調査のためのチームが組まれた。この調査チームの



ハイデルベルク大学旧校舎，ベルツの遺産の調査はこの建物の三階右側の一画で行われている．（同大学美術史研究所提供）

指導のために私が招待されたという訳である。

調査期間中、二週間ばかり東京芸術大学の山川武教授、名古屋大学の河野元昭助教授の参加を得、調査はきわめて順調に進められた。いざ蓋を開けてみると、七〇〇点ほどは表具の完備したものであったが、それ以外に未表装のもの、下絵類がざっと二〇〇〇点はある。一点宛一枚のカードが用意され、基礎的なデーターは全て記入し、落款印章もできるだけ読んでは書き入れてゆく。それが終ると最後にＡＢＣ三段階のクラス分けを記入する。カードはドイツ側のチームに手渡され、基礎資料となる事項は全てローマナイズされる。それと同時に作家名、画題の索引が片っ端から作られてゆく。調査の手を離れた作品は写真班に手渡され、記録写真が一点一点撮られてゆく。写真班にはインゲボルクという女性カメラマンが一人頑張っていて、抜群の要領の良さと判断力でもって厖大な量の記録撮影を処理して行く。これが調査の全行程であるが、どんなに頑張っても今回は調査総数七五〇点に止った。

コレクションの中味は大部分が江戸時代の絵画であるが、過半数は我々も名を知らない画家達の作品であった。しかし、それらを一点一点可能な限り調べてみると、大部分は狩野派、土佐派の旁系と考えられる板谷派、粟田口派等、言わば官画系の臭いの強い画家達、そして江戸時代後半期に於て官画系を遙かに凌いで画壇の勢力を維持していた円山派に属する画家達の作品等が多く、それに、いずれの流派にも属さぬ、いわば町絵師系統の作品も相当数含まれていた。中には、画家としてかなり

名の通ったものであるにもかかわらず、日本ではほとんど確認し得なくなっているような作品も含まれている。結局、日本人が従来無視し続け、その存在すら忘れていた画家達の作品がこうした異国でなお健在であるという事実は、我々を少なからず戸惑わせた。そして、その時代における作風の系統的理解という大義名分のもとに、選択と整理を繰り返し、それに馴れ切っている我々の目には、こうした群を成す作品の集まり、作家の集合が別世界のように見え、江戸時代の絵画活動の脹みとその層の厚さのようなものを感じさせるのは不思議である。歴史の中できらびやかにその名を留めている画家達が実はそうした厚い層に支えられているという現実を改めて思い起こさせてくれた。

このコレクションはドイツという日本を離れた場所にではあるが、やはりベルツが我々に残してくれたもう一つの遺産であることには違いない。私はこの調査にたずさわったのを機会に、もう少しこのベルツ・コレクションなるものに立ち入ってみたくなり、帰国後このコレクションの事実上の管理責任者であるリンデン美術館のブラント氏から得たこれにまつわる情報を反芻しつつ、何か手掛りはないものかと『ベルツの日記』などを読み始めてみた。

ベルツは明治九年（一八七六）、期待と不安を一身に担って日本に着任し、東京医学校のお雇い外人教師の一人に加わる。その後、東京医学校は東京大学医学部となり、結局明治三十五年（一九〇二）までの二十六年間そこで教師をつとめることとなる。東京大学を退いたベルツは引き続き宮内省御用の侍医となり、更に三年間とどまるが、明治三十八年（一九〇五）六月、妻ハナを連れて日本をあとにした。

ベルツの三十年近い日本滞在中、彼は三度ドイツに帰国する。第一回は明治十七年（一八八四）から十八年にかけて、第二回は明治二十五年（一八九二）から二十六年にかけて、そして第三回は明治三十三年（一九〇〇）から三十四年にかけてであった。明治三十八年には日本を完全に引き払う訳であるが、二五〇〇点に余るコレクションはこの最後の帰国の際に持ち帰ったものと私は想像していた。ところが、リンデン美術館のブラント氏の話によると、どうやら第二回目の帰国の際、即ち明治二十五年にこれら一切の美術品を持ち帰ったようである。というのは、翌明治二十六年にこのコレクションの一切がリンデン美術館に一括売却されているからである。事実調査を始めてすぐに気付いたことであるが、どの絵にも表装の裏に10M（ゴールド・マルクのこと）とか15Mと、リンデン美術館が買い取った値段が几帳面に書き留められている。結局ベルツは自分のコレクションを売却することによって、現在の日本の貨幣価値にして六千万円を得、それで直ちにベルツ邸を建設したようである。勿論、ベルツ・コレクションは江戸時代の絵画が全てではなかった。一五〇点ほどの薩摩焼を中心とした陶器をはじめ、矢のコレクションなどもあり、これらは現在もリンデン美術館に保管されている。いずれにしても、ベルツは滞在十五年にして夥しい数の美術品を収集し、それを一度に持ち帰って巨額の金を得、シュトゥッツガルトから程遠からぬ彼の故郷ビーティー

ハイムにベルツ邸を建てたのである。

日本の美術品の収集、売却、故郷での家の建設といったベルツの一連の行動は彼自身の内部で既に予定されていたもののように思える。ヴェスコヴィ（『日本医学の開拓者――エルウィン・ベルツ』の著者）によると、明治十七年（一八八四）第一回の休暇で帰国し、一年近くドイツに居てしみじみと故郷というものを味わったベルツは、これから再び日本へ行って三年ないし五年程暮らし、その後は故郷に戻って物質的に誰の世話にもならず、自分の思い通りの仕事をしたいと思っていたという。勿論その後この計画は微妙な狂いを見せ、日本女性ハナとの結婚、長男トクの誕生を経てベルツの日本滞在はずるずると長引く訳であるが、美術品の精力的な収集、売却、故郷での家の建設等は、この頃抱いていた思いに貫かれた一連の行為であったと思われる。ベルツが故郷へ自分のコレクションを持ち帰るまでの、即ち明治二十五年、第二回帰国までの『ベルツの日記』には、美術とか収集に係る記事がきわめて少ない。着任した明治九年（一八七六）の十一月三十日、東京の大火でオーストリア公使館が焼失し、その際、フォン・シェーファー公使は大規模且つ貴重な陶器、金工の収集品を全てなくしたことに触れているので、この頃既に異国人による日本美術コレクションの実態を見ていたことは事実である。しかし、翌明治十年十月二十日の日記では、日本画家の制作振りを見るため友人にさそわれて中村屋に出向いているのであるが、河鍋狂斎を含む当時最もすぐれた日本画家と言われる人達が試作を行なう現場に立ち合ったベルツは、この種の芸術の真髄が日本音楽と同様、依然として理解できないものであることを述べている。一方、明治十三年七月十三日にはフェノロサ夫人を往診したという一行が見えるので、この頃、往診を通じて、岡倉天心と共に日本美術の発掘と紹介に大きな業績を残したフェノロサを知る機会を得ていたと思われるのである。その後、フェノロサとの交流の実態は日記がかなり中断されているためもあって一切不明であるが、明治二十二年三月七日の項には、このフェノロサのもとでの夜の集まりに参加している所を見ると、かなり親しい交際を続けていたとみえる。そして同年四月二十六日の項では、画家河鍋狂斎（暁斎）のことに触れ、彼の絵は戯画に近いが、構想雄大で構成の重厚な点は他に匹敵するものなしと述べるほど、彼自身の日本美術に対する関心の度合に大きな変化をきたしていることが読みとれる。

第二回帰国までの美術に関連した記事はこれだけのことであるが、きわめて断片的なこれらの事柄を重ね合わせてみると、ベルツ・コレクションは第一回帰国後から第二回帰国直前までの八年間に集中的に行なわれたとしか私には思われないのである。日本美術収集の実態は既に当初から知っていた訳であるが、本格的な収集はやはり第一回帰郷の後に得たあの思い、即ち、再び日本へ帰って三年ないし五年は暮らし、故郷に戻ってからは物質的に困らない生活をしようと決心した時、ベルツの脳裏をかすめたのは、日本美術の大コレクションを作ること、そしてそれをドイツで売却して金銭を得ることではなかったか

と思われる。そして、彼の日本美術、特に江戸時代の絵画に対する興味と関心を高めるためにフェノロサの果たした役割はきわめて大きかったのではないかと想像されるのである。そのことは、ベルツ・コレクションの内容が何よりも良く物語っている。狩野派や土佐派にかかわる官画系の画家の作品、及びそれらの勢力を上回っていた円山派の画家達の作品に集中している点は明らかにフェノロサの志向と一致しているからである。

それにしても、僅か八年ばかりの間にこの一大コレクションを作り上げたという推測が正しいとするならば、普通では考えられないことで、コレクションとしてはやはり即製の感をまぬかれない。事実、ベルツの美術品収集にあたっては、フランス人ディーラーのバンなる人物が介在し、ベルツにかなり手を貸していたようである。ベルツは予定を大きく狂わせつつも、故郷での安らかな生活を夢見ていた訳で、いわば望郷の念がこうしたコレクションとして結晶して行ったのかも知れない。と同時に、彼の意に反してますます深く日本に根を下ろす結果となる。日本の各地を旅し、医者としての眼差を特に日本の地域社会にくばりつつ、同時に民族学的、人類学的な関心を常に抱き続ける。そうしている内に、日本を愛し、日本人を愛してしまったのであろう。日本人の生活様式を知り、それと深く係ろうとするベルツの気持は彼自身のコレクションの中にも反映している。西欧化へ急なあまり、日本人が見捨てようとしていた伝統儀式の数々、その儀式の次第や用具を細かく絵解きした巻物。佐渡鉱山での、人間が土や岩と絡みあうどろどろした作業状況から、罪人が縄をかけられるその様々な姿や処刑の実態等々、日本人の生活の臭いやその生生しい記録が強い関心をもって収集されているのである。

ふとした機会からベルツの知られざる一面に触れることができたのであるが、このベルツ・コレクションという第三の遺産から、さまざまな批判がベルツ自身に投げかけられるかも知れない。もし本当に芸術を愛する心があるなら、人類共通の財産ともいうべきこうした美術品を売却してまで家を建てることはできなかったはずであるとか、医者としての、又民族学者としてのベルツは高く評価しても、結局彼の美術収集は場当り的で、美術に対する真の鑑識眼は持ち合わせていなかったのではないか、等々。しかし、どんな形の批判があろうとも、それらを全て帳消しにする何ものかがベルツ・コレクションにはあるように思える。我々の知り得る青年ベルツは、将来有望な医学研究者であったようである。その彼を全く未知の異国へと駆立てたのは、彼自身の中に内在する途方もなく大きな浪漫的精神であったのであろうが、彼の日本への沈潜はあまりにも深く底なしの沼のように見える。その底なし沼から頭をもち上げる望郷の念は恐らく我々の想像を絶するものがあろう。このコレクションは我々日本人にとってもやはりかけがえのない遺産ではあるが、見方によっては、そこにこうしたベルツの心のうずきのようなものを垣間見る思いがしてならないのである。（了）

（筆者　ささき・じょうへい　京都大学文学部〔美学美術史学〕助教授）